

2025. 2. 15 「やりたい」があふれる、「好き」が止まらない、それこそが「愛」か

年長保育室の毛糸遊び。2月初めのFacebookにも紹介しましたが、どんどん加速しています。

先日の保護者の保育参加日に、保護者が教えてくれたミサंगाづくりをその後もやってみる子供たち。その横では、マフラー作りをしている子、毛糸での雪の結晶作りをしている子、作った結晶を飾る子など遊び方も人それぞれです。

ある日のみんなの時間。子供たちが作ったミサंगाをクラスで共有した後、「実は先生も今ミサंगाを作っていてさ…」と、丸く切り取った段ボールに切り込みを入れ、7本の細い毛糸を付け編んでいく製作途中のミサंगाを、新たな刺激として紹介しました。作り方はとても簡単。むしろ私はこれでないと作れません。すると、編み物大好き女の子たちは「それ昼からやってみたい!」と、すぐに目がキラキラしていました。

昨日までのミサंगा作りを見ていると、2本の毛糸でクルクル巻きながら作る子、3本で三つ編みのように作る子、そして、7本で作る子などいろいろな作り方が見られました。作りながら、「3本でつくるのが三つ編みながら、それは『7つ編み』だね!」「これ、よく見るとクラゲみたいだよ!」など会話しながら楽しんでいます。

そして、よく見ると作ったミサंगाを腕につけるだけでなく、髪の毛に飾りとして付けている子がいろいろいることに気がきます。一人は、髪の毛の三つ編みにミサंगाが編み込んであります。髪をまとめるゴムにミサंगाを付け、日に日にミサंगाが増えている子もいます。

毛糸を使った表現方法はいろいろです。毛糸の質感や色合いを子供たちなりに捉えながら、身に付け、おしゃれとして自分なりの表現へとつなげていきます。ある意味「好き」の先に個性が生まれ、自己表出してくるのかもしれない。

年長になり、箱と割りばしで作った毛糸を編む道具で、マフラーだけではなく、帽子やバッグなどいろいろなモノを作ってきた男児は、今、かぎ針を使って編むことに挑戦しています。かぎ針で帽子を作りたいそうです。朝一番に来ると、すぐに毛糸を持って作り始めます。そしてどうやったらできるのか、自分の力でなんとかやりたいからこそ、自分から教員にやり方を聞きに来て話を真剣に聞きます。新しいことを楽しみながら知っていく。好きを追求していくと、年長児でここまでやるんだ!世界がどんどん広がっていく!と、教員もただただ驚くばかり。「好き」というよりこれこそ「愛」。やりたいがあふれています。そして、その子の今の将来の夢は「自分で作ったマフラーを売る編み物屋さんをする」ことだそうです。

何か、好きがあふれ、将来の夢にもつながっていく素敵さに感動し、さらに幼児教育の中で一人一人が、何にどう出会い、その子なりの関わりの中でどう好きになっていくのか。好きになっていく過程で、どんどん新しい気付き・経験(知)を増やし、その子供たちにとっての「愛」となっていくのならより素敵ですし、出会いと関わりの過程の重要性を、子供たちの姿から改めて実感しています。

先日、本園の研究推進員会に岸野先生に来ていただいた時に、ここ数年、本園の研究副題の「好きが広がり世界をひらく」のことを考えながら、子供の姿や保育を捉え返してきたことによる保育実践の変容のことが話

題になりました。岸野先生からは、「愛と知の循環のもと、遊び性と世界性を視野に子供たちと活動を展開していくと、保育が変わっていくことを実感する」というお言葉もいただきました。

本園の研究を、長年にわたりご指導くださっている無藤隆先生、岸野麻衣先生が編著者のご著書『愛と知の循環』としての保育実践」(3月に出版予定)には、本園の実践事例も掲載されています。ぜひお読みいただければ幸いです。

